

遺族の集い「ミシユカの森」に6年ぶりに参加した。2000年12月の世田谷一家殺害事件で妹家族4人を亡くした入江吉さん(仮)が「悲しみと向き合い、生きる力に変えてゆかために」と毎年東京都内で催している。「ミシユカ」は事件で命を奪われた当時8歳のめいと6歳のおいのかわいがついていた小娘のぬいぐるみの名前だ。加害者を憎むのか、許すのか。厳罰化か、更生か。犯罪被害者の遺族はいや応なくそんな問いを突きつけられる。入江さんは最近、



ツイッターでこうつぶやいた。<犯罪被害者遺族だと、虚報か修復かを問われる。二項対立のボリテイクスの中では、遺族同士が分断が生まれてしまい、悲しんでる人たちが孤立するだけ。自由にツイッターでこうつぶやいた。>

ミシユカの森で

悲しめる世の中でありたい。同じ遺族の立場でも加害者に抱く感情は一人一人違う。社会が「犯罪被害者遺族」という単一のイメージを押し付けたり、二項対立で色分けしたりするだけ。自由になれ。小国綾子

色分けしたりすることが、遺族たちを分断させ、さらに苦しめている。と指摘する彼女のツイートを読んで、今年の集いにはどうして参加しようと思った。7日の「ミシユカの森」には、娘を殺害された山口県防府市の中谷加代子さんと、一人娘をいじめ自殺で亡くした横浜市の小森美登里さんが登壇した。入江さんと2人は4年前、「人権の翼」というグループを作り、刑務所や少年院で「被害者遺族」として「加害者」たちに思いを語り続けている。中谷さんのこんな言葉が胸に重く響いた。「加害者には幸せを感じ生きてほしい。それが再犯防止につながると思っています」。入江さんは「私は未解決事件の被害者遺族なので実際に加害者が目の前に現れたらどんな感情がわかわかりません」と正直に語った。

立場も感情も少しずつ違う人をつなぐのは「被害者の家族が誰をどう感じるか」がポイントだ。今年2回目の「ミシユカの森」は11月午後1時、東京都港区のヒョンセンター(田町)で、作家、平野啓一郎さんが「分人主義と与悲しみとどう生きるか」をテーマに講演した。参加費2000円。申し込みは、miconaka@nifty.com



二項対立から対話へ、新たな価値創造へ

加害者を憎むか、許すか。厳罰化か、更生か。犯罪被害者の遺族はいやおうにもそんな問いを突きつけられる、と入江さんは語る。しかし同じ遺族の立場でも加害者に抱く感情は一人一人違う。社会が「犯罪被害者遺族」という単一のイメージを押し付けたり、二項対立で色分けしたりすることが、遺族たちを分断させ、さらに苦しめている、と指摘するのだ。

今年の「ミシユカの森」には、娘を殺害された山口県防府市の中谷加代子さんと、一人娘をいじめ自殺で亡くした横浜市の小森美登里さんが登壇した。入江さんと2人は4年前、「人権の翼」というグループを作り、刑務所や少年院で「被害者遺族」として「加害者」たちに思いを語り続けている。



中谷さんのこんな言葉が胸に重く響いた。「加害者には幸せを感じ生きてほしい。それが再犯防止につながると思っています」。入江さんは「私は未解決事件の被害者遺族なので実際に加害者が目の前に現れたらどんな感情がわかわかりません」と正直に語る。

立場の少しずつ違う3人は、しかし「被害者の家族が語ることで憎しみの連鎖を断ち切りたい」という切実な思いでつながっているように見えた。

自由に悲しめる世の中を。入江さんの言葉を、私はあらためて深く胸に刻んだ。